2021.07.06

堀忠雄君のこと

小嶋祥三

堀忠雄君が 6 月 29 日に亡くなった。わたしは彼と早稲田大学の学部と大学院でともに心理学を学んだ。彼の思い出を書いて、彼を見送りたいと思う。

早稲田大学の文学部の心理学の実験室は東に延びた校舎の 2 階と 3 階にあった。その 2 階の廊下の奥の左側が、学習心理学、生理心理学の実験室で、わたしがラットの脳内自己刺激の実験をしていた。右側が生理心理学、精神生理学の実験室で、堀君や清水功一君、長谷川悦子さん、亡くなった丹治哲雄君がヒトや動物の脳波や GSR（SCR）の実験をしていた。

堀君は学部時代から、睡眠の研究を自分の一生のテーマと決め、睡眠研究にのめりこんでいた。この姿勢は亡くなるまで一貫していたと思う。今の言葉でいえば、オタク的に熱中していたようにみえた。これは研究には向いた性格だ。学生の頃、わたしは彼の睡眠実験の被験者になったが、彼はわたしの睡眠の特徴を、何年か経ってからでも、指摘した。いつも睡眠の実験のことを考えていたのだろう。かれは大学院生の時に睡眠に関する著書を持っていたし、広島大学の時代には岩波新書に睡眠の本を書いていた。

わたしは彼と広島大学の人事でぶつかった。わたしが霊長類研究所に在籍中に外部の研究機関へ応募したのは、この 1 件だけだった。結果は堀君が採用され、わたしはダメだった。わたしは人事についてそれまで多くを経験してきたので、この結果に負の感情を持つことはなかった。それには、わたしの滞米中の経験や、自分の業績に自信を持っていたことも関係していると思う。堀君を祝福する気持ちが強かった。

Google Scholar で調べたところ、1990 年半ば以降、堀君は学生と共に多くの英文論文を書いていた。わたしたちの先生方は、ほとんど英文の論文を書かなかった。わたしは霊長類研究所で理系の研究者と一緒になり、英文論文を持つことの重要性をイヤというほど思い知らされた。英文論文がないと、部門そのものの存続も怪しくなるのだった。わたしは英文論文を書き、学生にも書くよう教育した。堀君も学生を育てる努力をしたのだろう。わたしや彼が教えた学生の世代は、日常的に英文論文を書くようになっている。堀君がそのレベルに達しているのをとてもうれしく思った。

以下、彼の人柄や、思い出を書いてみる。

堀君は小柄だったが、エネルギーに満ちていた。かれは福井大学から広島大学へ移ったが、福井時代の彼の同僚が同じ感想を漏らした。彼はいつもクラスの中心にいたように思う。彼は「世の中」をしっかりと見ている人だったと思う。彼は早稲田の文学部内の勢力図？を知っていた。本明寛先生がいた心理は強力だとのことだった。わたしはそのようなことに全く関心がなく、考えたことも無かったので、その話を聞いた時には、彼の見方に驚いた。大学時代は学園紛争の時代だった。彼が学生活動家のいうことを信じていたとはとても思えな

い。わたしは覚えていないが、彼はスト破りをしたそうだ。そういえば、彼が気球に乗って太平洋を横断し、アメリカへ行くというプランを話してくれたことがあった。現実的な彼のことだから、単なる空想ではなかったかもしれない。ただ、彼は自分の能力というか、学力だろうか、に自信を持っていないような面があった。それが彼を傲慢さから救っていたように思う。

ある時、彼はわたしに脳内の電気刺激の技術を大切にするといいとアドバイスをくれた。彼は脳波や筋電図の記録をやっていた。その技術が将来、どこかの大学に就職するのに役立つと考えていたようだった。また、その技術をもって病院でアルバイトをやっていた。手持ちの技術が生活を支えていたので、そのようなアドバイスになったのだろう。彼は現実の社会とキチンと向き合っていたと思う。極楽トンボのわたしはそのようなことを考えたことがなかったので、そのアドバイスにはある意味感心した。

詳しくは聞いたことがないが、堀君の両親は不仲だったのだろうか。彼は父方の祖母に育てられたようだった。しかし、かれの結婚式に突然母親が現れた。彼の容貌は母親似だったのが印象に残っている。ご両親は和解したのだろう。

彼は奥さんを病で早く亡くしていた。大学院生の時だったか、彼には付き合っていた人がいたようだった。その人も病気で亡くなったが、葬儀では許婚者として出席したと言っていた。元気で明るかったが、彼には何か暗い面があった。奥さんを亡くした彼を見て、家庭的に恵まれない人がいるのだと、つくづく思った。

奥さんが亡くなってからだろうか、母親は彼と広島で暮らすようになった。彼の二人の息子は彼の母親が世話をしたのではないだろうか。この点は彼自身の生い立ちと重なる。堀君は誤嚥性肺炎で亡くなったが、彼の母親も同じだったと記憶している。

堀君はエネルギーに満ちていたが、身体は丈夫ではなかったかもしれない。福井時代に、病名は忘れたが、病を患っていた。堀君と最後に会ったのは、2012 年の大学のクラス会だった。5 年後の 2017 年にもクラス会をやったが、彼の姿はなかった。その時はすでにパーキンソン病を発症していたのだろうか。早稲田の心理の後輩の宮内哲君が、彼の入院やその後の施設への入居に献身的な努力をしていた。堀君は後輩から慕われる人だったのだ。

ご冥福をお祈りします。

次ページから、堀君と一緒だった写真を貼っておきます。

2021.07.06

学部時代、伊豆大島への旅行。前列右端が堀君。

伊豆への卒業旅行。いずれの写真も左端が堀君。

2021.07.06

大学院入学記念。前列右端が堀君。

清水功一君の家のそばの洗足池で。左から 2 人目が堀君。

2021.07.06

堀君が出席した最後のクラス会。前列中央が堀君。

中央が堀君。